

三一新書 517

シャドウマン／夜の壁画

邦 光 史 郎 著



邦 光 史 郎
くに みつ し ろう

1922年 東京に生まれる

著 書 『社外極秘』(三一新書)『色彩作戦』(三一新書)
『欲望の媒体』(三一新書)『負けるが勝ち』全三
部(三一新書)『泥の勲章』(講談社)『仮面の商
標』(ポケット文春)『重役紹介会社』(三一新書)
『鉛の箱』(カッパノベルス) 他

夜の壁画／シャドウマン

定価 280 円

1966年2月23日 第1版発行

著 者 © 邦 光 史 郎
1966年

発 行 者 竹 村 一

印 刷 所 同興印刷株式会社

製 本 所 本間製本株式会社

発行所 株式会社 三 一 書 房

東京都千代田区神田駿河台2の9
電話 東京 (291) 3131~5 番
振 替 東 京 84160 番

落丁・乱丁本はおとりかえいたします

三一新書 517

夜 の 壁 画

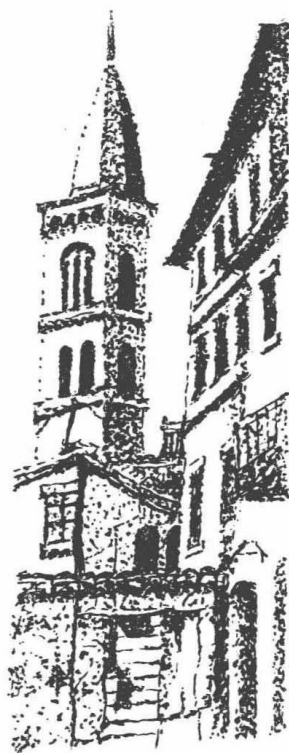
シャドウマン

邦 光 史 郎 著

三 一 書 房

シャドウマン／夜の壁画 目次

第一章	情報市場	5
第二章	点検	37
第三章	佐多岬	79
第四章	ラムダ三型機	109
第五章	箱の中の蠅	137
第六章	ブラック・レディ	165
第七章	第三あかつき丸	197
第八章	黄金の棺	225



Xタイムとはロケットの発射時刻のことである。

その日、内ノ浦は晴天であった。

Xタイム、一時間十分前、来賓と報道関係者たちは、ロケット基地の後方にある三〇〇高地へと急いでいた。

一たん基地のゲートを出て、彼らはゆっくり背後の丘へと登って行ったのである。その中に七名の外人がまじっていた。うち三名はアメリカ人、二名がフランス人、残りはフィリピンと台湾からきたアジア人各一名ずつであった。

来賓の腕章をもらっている以上、内ノ浦の町役場か東大の宇宙航空研究所から許可をとっているはずだった。

その頃、本部では、サイレンチェックと救護班、花火班の準備が行われていた。

何しろ失敗することを許されないロケットの発射実験が、これから約一時間後に行われるのだ。

昭和三十年四月十二日に、全長わずか二十三センチメートルのペンシル型ロケットをとばして以来、わずか九年間のあいだに、東大グループは、米ソについて世界第三の実力を誇るロケット技術を積み重ねてきたのである。

ロケットの卵ともいうべき二十三センチのペンシル型からスタートして、ベビー、カップパー、ラムダ型と成長をとげた日本のロケットは、いまでは全長二十メートルにも及ぶ、ラムダ三型機を射ち上げるまで

に至った。

ラムダ三型機は、垂直にとばすと高度千キロメートルに達し、水平距離にして千九百キロメートルもとぶのである。

鹿児島県大隅半島にある内ノ浦ロケット基地から東南千九百キロメートルの地点といえ、太平洋上に位置するマリアナ諸島がある。

実はすでに現在、その附近まで日本のロケットはとんでいるのだ。

ところが、一九六五年に最初の人工衛星を載せたとぶことになっている四段式ミュー・ロケットともなると、垂直に打ち上げれば一万二千から二万キロメートルの高度、これを水平に廻せば、そのまま人工衛星の軌道に入ってしまうというすばらしいものなのだ。

しかも、現在米ソにつぐ第三のロケット王国をめざしているフランスの年間予算が二百五十億円だというのに、東大グループはわずかに年間二十五億円しか予算を割当てられてはいない。

二十五億円で、数々の世界記録を打ち樹てた日本のロケットは、当然世界各国から注目され、その安全かつ経済的で性能のよいロケット技術を盗み取ろうとする動きが激しくなってきた。

むろん、他国のロケットはすべて厚い軍事機密の壁に覆われ、フランスなどは実験場の立入りすら厳禁しているほど警戒がきびしい。

ところが日本のロケットは学術公開の立場をとっている、研究論文はむろんのこと、ロケット基地すら一般公開していて、誰にでも見学を許可している。

そのために、ロケットの射上げ当日ともなれば、観光バスをつらねて、一般見学者がロケット基地へつめかけてくるのである。

ちょうどX時五十六分前のことであつた。

大隅高山警察署こうやまから警備のために派遣されてきた三十三名の警官たちが、基地内のゲート附近で大型ジープをおりようとしてゐる時、そんな観光バスの一台が坂道を下つてきた。

貸切りのマイクロバスとみえて、乗客は十五、六名ばかりなのである。

「ほオ、女優さんみたいにきれいな娘さんがまじつてゐるじゃないか」

若い警官の一人が通りすぎて行くマイクロバスを眺めてそう呟いた。

たしかに、サングラスをかけた都会風の女が二人ほど、バスの窓越しにロケット・センターの方角を物珍しそうにみつめてゐるのが見受けられた。

だが、警官たちの任務は、見学者たちの動静を監視することではなくて、あくまで交通整理と危険防止に限られていたから、たとえ一般見学者の中に、どこかの国から派遣されてきたスパイがまじつていようと、別段、気にすることはなかったし、それに関心をもつような権限を与えられてもいなかった。

彼らは、千メートル警戒線の配置につき、一般見学者を乗せたマイクロバスは、グリル・ながつぼの附近で停車した。

大隅半島の山中ともいふべきこの辺鄙な内ノ浦町長坪部落に、しゃれた外観をもつグリル・ながつぼが店を開いたのは、むろん一般観光客が目当てであつたのだ。

すでにその附近から一般見学者席のある二〇三高地一帯には、色とりどりの観光客たちがぎっしりつめかけていて、X時間のくるのを待ちわびていた。

けれど、この四つの丘をきり開いて作つた十五万坪の人工台地の広さからみれば、その見学者席のある附近は、ほんのささやかな点にしかすぎなかつた。

彼らは、やや小高い丘の中腹から、眼下に展けるロケット基地と、その背後に紺碧の色調を盛り上げて、
いる広漠とした太平洋を眺めていた。

海はどこまでも広く、そして空はあくまで晴れわたって、南国の太陽が眩しい光を頭上に掲げていたの
である。

北緯三十一度線に近いこの内ノ浦には、棕櫚や蘇鉄の樹が茂り、頭上に浮んだ綿雲は鮮やかな白色を呈
している。

そのあまりにも澄み切った大気を引き裂くようにして、高らかにサイレンが鳴りわたった。

X時三十分前を示すそのサイレンと同時に、真っ紅なB旗が、すでに朝から出ていた黄色いA旗となら
んで掲げられた。

いよいよ射上げ実験が目前に迫ってきたのだ。

保安自動車は待機し、白いヘルメットをかぶった百二十名の実験要員たちはそれぞれの腕時計を標準時
に合わせた。

X時二十九分前、総員は退避した。

もし全長十九・二三五メートル、全重量七キログラムのラムダ三型機が、頭上で爆発事故でも起こそ
うものなら、それこそ一たまりもない。

そうでなくてもロケット噴射の火焰と煙は一瞬発射台を覆い隠してしまうほどすさまじいのである。

すでに角度をセットされた発射台には、ラムダ三型機が吊り下げられていた。

赤白だんだんに塗装されたその三段式ロケットは、まるで一本の巨大な矢のように鋭く空に向って頭角
を揚げ、あたりにはもう人影は全く見られなかった。

すべての指令は発射台センターの右上方に位置するコントロール・センターから発せられ、ロケットを監視している二台の自動テレビ撮影機は、忠実にロケットの状態をセンター内部に伝えていた。

X時五分前。

本部は回避確認を行った。

ロケット飛翔中、電波を妨害しやすい自動車のエンジンは一切作動を止められ、警官たちは、内ノ浦町からこのロケット基地へと通じているロケット道路の交通を遮断した。

発射台の位置から約二キロはなれている二〇三高地に設けられた一般見学者席でも、すでに話声は聞かれなくなり、肩をすくめ気味に首を前方に突き出している人びとの顔には緊迫感がみなぎりはじめた。

その状況は、発射台から六百メートルほどしか離れていない三〇〇高地の記者席でも同様であった。

腕に、報道班とマジック・インクで書き込んだだけの白い腕章をつけている二十人ばかりの記者の中に、皮服をきた二人の女性がまじっていた。

彼女たちの一人は、望遠レンズをつけた十六ミリ撮影機のファインダーをのぞき込み、もう一人は、しきりにメモを取っていたが、その様子に注意を払う者は誰もいなかった。

記者やカメラマンたちは、たった二秒間で視界の外にとび出してしまいうラムダ三型機の発射情景を見落さないために、わき見をする余裕など全く持たせてはいなかったのである。

X時二分前、すると打ち上げられた火花が一発、ロケット基地の上空で爆けて鳴った。青く乾いた空に火花が散ったその直後、人々は息をつめて、視線を一点に凝らしつづけた。

X時一分前。コントロールがスタートした。
秒読みがはじまったのである。

コントロール室の中央に据えつけられた調整盤のどまん中に陣取る実験主任の低い声が、マイクに向
って吹き込まれた。

三十秒前、タイマースタート。

二十九秒前、タイマー確認。

地上三十メートルの高さにそびえ立つ直径十八メートルのトラッキング・テレメーター・アンテナが巨
大なまん丸い耳を傾け、あらゆるレーダーは耳を澄まして、X時を待機している。

コントロール・センターの電光時計が刻々とその数字を小さく変えていた。

「十秒前、九、八、七……」

巨大な矢は、仰角七十九度にセットされたまま静まり返っている。

「六、五、四……」

第一、第二見学所で瞳を凝らしている人たちは、なんとなく眼球がひとりでに湧き出してきた涙に曇り
はじめたように思った。

「三、二……」

東南方にひろがる海から吹きつけてくる風さえ静止したようだ。

「一……発射！」

一瞬、それは何一つ変化しないかのようであった。

フラッシュ点火○・一四秒後、煙と焰が尾翼のあたりから噴き上り、それはたちまち大きくふくれ上っ
てロケットの下部と発射台^{ランチャー}を包み込み、○・五二秒後、ゆっくりロケットは発射台から脱け出し、一・〇
四秒後には火焰を吐き捨てて大空に飛翔を開始した。

そして七秒後に第一段ブースターは燃焼を終り、第二段は十分間飛翔して高度三百七十メートル、水平距離四百八十キロメートルに達し、なおも南東海上にとびつづけた第三段は到達高度千キロメートル、水平距離千九百キロメートルの全行程を、十七分二十秒間の飛翔によって終絶した。

Xプラス十五分の後、紅いB旗は下ろされ、実験終了を告げる花火が二発、いまは煙ひとつなくなった内ノ浦上空に鳴りわたったのである。

2

それから二日後、島村英治は、思いがけない場所で、ロケット実験のフィルムを見せられた。

その場所は、原宿附近のマンションであった。

七階建の最上階だったから見晴しはすばらしく部屋も豪華で申分なかった。

客たちは、ゆったりした肘掛椅子にからだを預けて、それぞれにブランドイを甜めたり葉巻をくゆらせたりしながら、上映されるフィルムを眺めていたのである。

彼をここへ案内してくれたジョージ・レイモンドは、右頬にえくぼを刻みつけて、軽く島村の肘をつついた。

「日本製のロケットも、この市場でセリ売りされるようになればたいしたものだよ」

ジョージは至って単純な神経の持主だったから、むろん厭味でそう言ったものではあるまいが、島村は眉をしかめた。

日本製のロケットが、この秘密市場でセリ売りされると知っただけで、彼は自分の妹が奴隷市でセリ売

りされているようなたたまれのなさを覚えたのだ。

しかし司会者は、そんな彼の感情などには構っていなかった。

「いまごらん頂いたのは、日本製のロケット、ラムダ三型機ですが、性能諸元に関しては、すでに御手許に差上げてあります刷り物に詳述してございます」

ドイツ系の男とみえて、ひどく鼻梁が高く、ごつごつした顔つきなのだ。

しかし、言葉はあくまで滑らかな米語を話していた。

「では、ここに、ラムダ三型機的设计に関する最新情報をおつしやる方がありますので、御希望の方は、値を入れて頂きたいと存じます」

むろんその提供者が誰であるかは分らなかった。

この秘密情報市場は、こうして持ち込まれた各国の極秘情報をセリ売りして、希望者に売りわたすことを目的とした一種の仲介機関なのである。

肥満したラテン系の爺さんが頬肉をふるわせながら質問を試みた。

「むろん、公開資料には出ておらんような精密設計図がついているんじゃないかな」

詰問するような口ぶりだったが、司会者は、にこやかに答えた。

「もちろんその設計図どおりにロケットを組立てることが可能であることは間違いありません」
爺さんは顎を引いてうなずきながら、メモ用紙に何かを書き込みはじめた。

「ところで、推薬の方はどうなんです。肝心の推進薬の製法が分らなくては、なんにもなりませんからね」

呟くようにそう問いかけたのは、小柄な東洋人であった。

色白でどことなくおっとりした顔だちをしている所を見ると、どうやら中国系の男であるらしい。

司会者は、すこしたって答えた。

「残念ながら、推薬に関する情報の持合せはないそうです。何分、機体と推薬は別々に開発されておりますので、そこまではこの提供者もまだ情報を手入しておりません。しかし、御希望でしたら、別に、推薬の情報提供者をお探しいたしてもよろしゅうございますが、御注文なさいますか」

中国人は考え深そうにややためらってから大きくうなずいた。

「引受けてもらえるなら、それに越したことはないんだが、こちらにも予算の都合がありますのでね」

「どれ位ならよろしいか、一応予定額をお示し下さいませんか」

「そうですね。ロケット本体と推進薬、このワンセットを、三千万円と考えているんですが、いかがでしょう」

すると、たちまちラテン爺さんが吠え立てた。

「わしなら三千万円は出してもいい。もし完全なものならの話じゃがね」

ぜいぜいと咽喉笛が鳴っているような声なのである。

「あの爺さんはきつと呼吸器をやられているね。その上心臓もすこしわるいようだ」

ジョージ・レイモンドはまたえくぼを浮かべた。

いつでも機嫌のよい男なのだ。そのくせ神聖な任務だからと笑いながら引金のひける人間なのである。

「三千万円という値が付きましたが、他の方はいかがでしょう。このロケットは大変優秀でして、千九百キロメートルもとぶのですから、改造すれば充分ミサイルの役目を果します」

客席を見渡して、司会者はそう煽り立てた。口上係というものは、露店の叩き売屋も情報市場の司会者

も、本質的には同じようなものなのかもしれない。

「三千六百万」

片隅にいた女性がかん高い声を張り上げて、値を入れた。

銀鼠色の上品なツーピースに黒っぽい帽子をかぶり、狐眼のように釣り上った眼鏡をかけているが、まだ充分若さをとどめている肢体なのだ。

「あれは近東連合の大使館に勤めている第二秘書ということになっているが、むろん、われわれと同業であることは間違いないだろうね」

どうやらジョージは、今日のセリ市に出席しているメンバーをチェックするためにここへやってきたものらしい。

この出席者の顔ぶれは、ヨーロッパはむろんのこと、中近東、アジア各地、それに当然自由主義国家以外の諸国からも出席しているものと思われた。

つまり呉越同舟の情報市場なのだ。

かなり広い部屋のあちこちに植木鉢やテーブルが配置され、巧みにお互いの姿を隠せるようにしてあったが、それでもざっと数えたところ十四、五人の出席者がいる様子だった。

「いかがでしょう、三千六百万円という値が入りましたが……」

司会者は、油断ない物腰で室内を見廻した。

「三千六百五十万円」

中国人が小さく値を刻んだ。

「あの男は、香港と東京にナイトクラブとレストランをもっている華僑だが、それも単なるカムフラ―